

山地研究
プロジェクト
News Letter
Vol. 1
(July 2006)

山地生態資源の持続的利用のための技術融合と制度設計

- 東南アジアを中心として -

グローバリゼーションの波は、政治連携や経済統合にとどまらず、人間の安全保障や貧困撲滅、さらに環境ガバナンスなど、人々の生活・生業に密接に関連するレベルまでをも包摂しようとしています。本研究は、東南アジア大陸部を中心とする山地を対象地域として、市場経済の浸透や近代的資源管理制度の導入などによる住民の生態資源利用の変化過程を明らかにし、グローバリゼーション下で生態資源を持続的に利用するための技術融合と制度設計を提示することを目的としています。

プロジェクトリーダー	河野 泰之	京都大学東南アジア研究所
コメンター	Roy C. Sidle	京都大学防災研究所
	山口 哲由	京都大学生存基盤科学研究ユニット
	藤田 幸一	京都大学東南アジア研究所

山地の現在

山地環境の特徴は、起伏の激しい地形にあります。この地域に暮らす人びとは、地滑りや洪水といった傾斜地の災害と向かい合いながら、地域の環境に応じて農林業や家畜飼育、森林産物採集などを営み、山地の生態資源を利用してきました。

これまで山地社会は、交通インフラが不十分なために、それぞれの国で政治的・経済的に周辺部に位置づけられてきました。しかし近年のグローバリゼーションのもと、山地社会も急速に周辺の社会との結びつきを強めています。その結果、地域の環境や人びとの生活は大きく変わりつつあります。

東南アジアのタイ、ラオス、ミャンマーの内陸部や中国西南部(図1)はちょうどそういった変化を経験しつつあります。これらの地域では、大規模な市場向けの商品作物が導入され、水力発電所が建設され、そして観光業と連動した国立公園や自然保護区の設置が進んでいます。



図1 東南アジア大陸部地域
(標高が高い地域を茶色で表示)

チベットやヒマラヤ山脈との接点にでもある東南アジア大陸部は、起伏の激しい山地となっている。これらの地域は、近年まで辺境とみなされてきましたが、交通インフラの整備とともに、グローバル化が進行しています。

グローバリゼーションと山地

中国西南部・雲南省の標高3000mにある村落(写真1)では、1995年頃から、日本に輸出するために、マツタケ採集(写真2)が盛んにおこなわれるようになりました。マツタケによって大きな現金収入を得た村人は、道路を建設し、農作業を機械化し、そして生活用品を市場で購入するようになりました。

この村の人々にとって、マツタケは新たな収入源であるのみならず、彼らの生活を根本から変える契機となりました。親から子へと受け継がれてきた技術に支えられてきた生活を、マツタケによって得た収入によって、いわゆる近代的な技術と大規模な市場に依拠した生活へと転換しつつあるからです。

このような村人たちの試みが持続的な発展へとつながるのかどうか、また山地環境に適したもののなかのなかを、注意深く見守る必要があります。



写真1 中国西南部の村落

マツタケにより収入が倍になった世帯もみられ、庭先にはパラボナンテナが設置してあります。

写真2 日本に輸出されるマツタケ

採集されたマツタケは、あらゆる交通機関を駆使して3日間日本まで運ばれます。

ローカルな技術

山地では、その特徴に応じた資源利用や環境利用がおこなわれてきました。例えば、棚田もその一つです。急傾斜地に造成された棚田での農業生産は、常に地滑りや土砂崩壊、洪水などのリスクに直面しています。これらのリスクを軽減し、自然災害を未然に防ぐために、農民は日常的に棚田を見回り、手入れをします。そこに見られる土と水と作物の管理技術は、地域によって異なり、あるいは棚田一枚ごとに異なる場合もあります。ローカルだけれども、農業生産と傾斜地保全という複雑な問題に対応できる技術です。

山地が直面している複雑な問題に対して、これらローカルな技術がどのように対応し、克服しようとしているのか、この点についてもまだ分かっていないことが多くあります。詳細にローカルな技術を検討していくことが、ローカルな技術と近代的な技術の融合していくうえでの一つのカギになるのではないかと私たちは考えています。



写真3 中国西南部の棚田の風景

中国雲南省中部、標高2000m付近傾斜地には広大な棚田が広がっています。これらの棚田の維持には、季節に応じた水の管理、畦や水路の定期的な修復が重要であるとともに、それらの技術を継承し、維持・管理を実践する基盤として地域社会が重要な意味をもっています。

技術と地域 -フィールドワークを通して-

技術がそれぞれの地域にどのような影響を及ぼしているのかを検討する際に、その技術が生み出す生産性や効率性だけにとらわれるのではなく、技術をそれぞれの地域の社会や自然環境という文脈に位置づけて、その技術の持続性を多角的に検討していく必要があります。

フィールドワークという研究手法は、技術と人々の多面的な関係、複雑に絡み合う状況を把握し、技術の持続性を検証する最も有効な手段ではないでしょうか。フィールドでの観察は、自らの土俵に引き込んで分析しようとする研究者の視点に対して常に問いを投げかけ、本質的な課題への道筋を照らしてくれます。フィールドワークを主たる方法論として、山地という環境を舞台とした技術融合と制度設計を提案していくことが本研究プロジェクトの目的です。(山口哲由)



写真4 サルウィン河の河岸に分布する村落

サルウィン河上流域の両岸には標高差500m以上の急峻な谷が刻まれています。こういった谷間にも段々畑を切り開いて人びとが生活しています。

山地研究会

本研究プロジェクトのメンバーが中心となって、山地における様々な問題を多角的に分析するための交流の場として「山地研究会」を組織しました。この研究会は、山地を、自然、経済、政治、民族、交通などの面で平地とは異なる地域と位置付けて、同地域における災害や貧困、民族紛争などといった諸問題を山地という場が有する諸特徴との関連で分野横断的に分析することを目的としています。国内外において山地に関して研究をおこなっている研究者、政策担当者などを招いて発表して頂き、それらを題材にして議論をおこなっていきたくて考えています。

第一回のセミナーは9月下旬を予定しておりますので、興味をお持ちの方は下記までご連絡下さい。



メンバー紹介



河野 泰之 京都大学東南アジア研究所・教授
農学博士 現在の専門：東南アジア研究

農業開発と環境保全の調和や在来知識と近代技術の融合などをテーマに、タイ、ベトナム、ラオス、ミャンマーなどの東南アジア大陸部諸国の農山村を歩いている。



藤田 幸一 京都大学東南アジア研究所・教授
農学博士 現在の専門：アジア農村開発論

アジア農村を対象にして、生業経済が市場経済化の波に洗われるプロセスを経済学的視点から研究している。バングラデシュ、インド、ミャンマー、ラオスが主なフィールド。



Roy C. Sidle 京都大学防災研究所・教授
Ph. D. 現在の専門：水文地形学

水文地形学的観点からの山地における洪水や地盤災害の発生過程の検討している。近年はアジア発展途上国において土地利用変化や道路建設が、土砂生産、流送、下流域での土砂災害に及ぼす影響評価もおこなっている。



山口 哲由 京都大学生存基盤科学研究ユニット・研究員
博士(地域研究) 現在の専門：文化地理学

人と動物の関わり方に関心を持ちながら、チベットを中心とした牧畜地域でフィールドワークをおこなっている。

京都大学生存基盤科学研究ユニット「山地研究プロジェクト」
〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46 東南アジア研究所内 Tel.: 075-753-7392
URL: www.cseas.kyoto-u.ac.jp/mountain E-mail: tetsu@cseas.kyoto-u.ac.jp